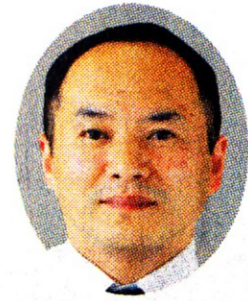


広がるトリ科学



国際鳥類内分泌学シンポジウムに向けて

品種改良とその責任



桑山岳人教授

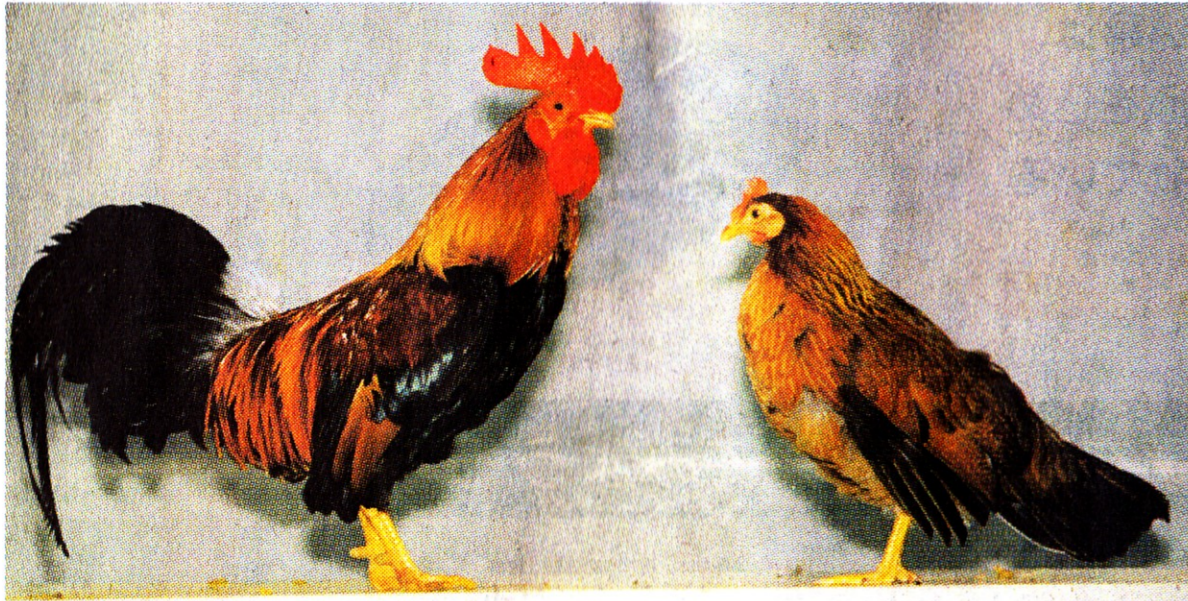
家禽(かきん)産業の最初の目的は、良質なたんぱく質である卵や肉を我々人間に供給する事です。従って、経済的に効率良くそれらを人間に供給するために、品種改良や飼養管理技術の向上が進められてきました。

ニワトリを含め鳥類が卵を産むのは子孫繁栄のためです。本来、野生のニワトリは数個から10個前後の卵を産むと、巣の中でそれを温める(抱卵:ほうらん)という性質をもっています。卵を温め始めると、1日をほとんどの時間を抱卵行動に時間を費やし、21日でヒヨコが孵化(ふか)します。母親はヒヨコの孵化後は、ヒヨコが自立できるようになるまで子育て(育雛:いくすう)に精を出します。従って、卵を温め始めてからヒヨコが独り立ちするまで、本来なら卵を産まなくなります。しかし、ニワトリが卵を産み続ける場合があります。それは、外

就巢行動、解明する必要

東京農業大学 農学部教授

桑山岳人氏



就巢、抱卵および育雛の行動を持つ岐阜地鶏

岐阜市で6月、市民講座

市民公開講座「広がるトリ科学の世界」(岐阜新聞・岐阜放送後援)は6月7日午後4時から、岐阜市長良福光の長良川国際会議場で。対象は高校生、一般。参加費無料。

敵によって卵を盗まれたり、巣が荒らされた時です。これはニワトリが子孫を残すために備わった予備能力が発揮された場合です。それに目を付けたのが人間です。このように、ニワトリにとって大切な抱卵行動や育雛行動も、卵を欲しい人間にとっては不利益な性質であり、この性質を排除すべく予備能力が高いたシチメンチョウなどいニワトリを選抜し品種改良を進めた結果、白色レグホーンのように、全に排除されておらず、それらの効果的な全く抱卵行動や育雛行動を発現せずに、年間300個以上の卵を御している遺伝子を特

